

目次

原 始 期

はじめに	一
第一章 旧石器時代	二
第一節 概説	二
一 前期旧石器時代	二
二 後期旧石器時代	三
三 晩期旧石器時代	三
第二節 相模川流域地方の旧石器	四
一 前期旧石器	四
二 後期旧石器	四
三 晩期旧石器	四
第二章 縄文時代	五
一 日本最古の土器	五

二 大平式土器	五
三 大火山遺跡	六
四 藤右衛門屋敷遺跡	七
五 宮田貝塚	九
六 馬塚石コブ	一二
七 石刃 鐵	一三
八 縄文前期の橋南側突文土器	一四
九 大木 5a 式・浮島式土器	一五
一〇 銅取 1 式	一五
一一 有孔土偶	一六
一二 磨製石鏃	一七
一三 縄文晩期末糸痕文土器	一八
一四 有孔土偶	一八
一五 玦状耳飾	一九
一六 硬玉製裝身具	二〇
第三章 弥生時代	二二
第一節 弥生文化の東進	二二

第二節 相馬双葉地方の弥生土器	二三
一 板井式以前	二三
二 板井式	二四
三 天神原式	二五
四 天王山式以前	二五
五 天王山式	二六
六 新城山遺跡と弥生終末期	二八
第三節 相馬双葉地方の弥生文化に伴う遺物	二九
一 アメリカ式石鏃	二九
二 紡錘車	三二
三 有角石斧	三四
四 管 玉	三七
五 磨製石剣	三八
六 石胞丁	三九
第四章 古墳時代	四一
第一節 古墳造営の時期	四一
第二節 古墳時代各論	四三

一	清戸迫装飾横穴	四三
二	羽山装飾横穴	四四
三	「真野村線刻横穴」	四八
四	淡岩横穴の線刻痕	五〇
五	古式土器	五二
六	石製模造品	五七
第五章	古代の考古資料	六〇
一	古 瓦	六〇
二	土器を出土する貝塚	六六
三	製鉄関連遺跡	六七
四	腰骨器	七六
五	官衙遺跡	七七
六	糸里遺構	七九
「原始」付 記		八〇

図版目次

図版 1	晩期旧石器 大坂遺跡 飯館村 1~5 打製石斧 6 尖頭器 7~16 剥片石器
------	---

図版 2	後期旧石器 上総屋敷遺跡 大熊町 17 ナイフ形石器 18 石月 19 彫刻刀 晩期旧石器 清水遺跡 大熊町 20 有蓋尖頭器 21 剥片石器 22 尖頭器
図版 3	縄文土器 早期 大火山遺跡 飯館村 23~34 田戸下層式 35~48 田戸下層式併行 縄文土器 早期 49~63 田戸下層式・田戸上層式併行 大火山遺跡 飯館村
図版 4	縄文土器 松下A遺跡 大熊町 65 石匙 66 撥切石斧 藤右衛門屋敷遺跡 小高町
図版 5	魚類遺体 Ⅱ 宮田貝塚 67 スズキ 68 クロダイ
図版 6	魚類遺体 Ⅱ 宮田貝塚 69 マダイ 70 マツダ 71 エイ 72 コチ 73 サメ
図版 7	哺乳類遺体 Ⅱ 宮田貝塚 74 イノシシ 75 イヌ
図版 8	哺乳類遺体 Ⅱ 鳥類遺体 Ⅱ 宮田貝塚 76 タヌキ 77 キツネ 78 ノウサザギ 79 テン 80 キジ 81 シギ 82 カラス
図版 9	鳥類遺体 Ⅱ 骨角器 宮田貝塚 83 ウミウ 84 カモ 85 骨角器 ①② 釣針 ③④⑤ ヤス
図版 10	86 花模下層式 鳥見遺跡 87 関山式直前 宮田貝塚 88 関山式併行 宮田貝塚
図版 11	宮田貝塚土器 89 縄の曲線状押捺文ナールプ文 90 重層ナールプ文 91 磨削文 92 山形状重層ナールプ文 93 複節斜行縄文 94 爪形文ナールプ文 95 磨削文ナールプ文ナールプ文

図版 12 96 三本橋南刺突文 大火山遺跡 97 100 大木 5a 式 101 102 貝殻背庄痕文

羽白 A 遺跡

図版 13 103 刺取 1 式 向燬遺跡 大熊町

図版 14 104 条痕文深鉢 東畑遺跡 原町市

図版 15 105 有髯土偶 106 土偶 (脚部) 大洞 A 式 107 土器 大洞 A 式併行 羽山遺跡 原町市

図版 16 108 石刃 109 磨製石 110 石剣 111 石刀 112 羽白 C 遺跡 飯館村

113 割片石 114 磨切痕のある鹿角 宮田貝塚

図版 17 115 耳飾 116 滝ノ原 117 八木沢 118 宮平 黒曜石 119 宮後 120 三貫地貝塚

121 黒曜石 122 石倉 123 桜井 黒曜石コブ 124 大畑 125 花輪 126 高塚

図版 18 127 土偶 (有孔) 128 土偶 (渦巻文)

図版 19 129 石胞丁 130 天神谷地 131 曲田 132 上ノ原 133 ソリ畑 134 天神沢

図版 20 135 アメリカ式石 136 上ノ原 137 マンカイ 138 畑ノ畑 139 桜井 140 高松

141 植松新田 142 天神沢 143 榎ノ木 144 神ノ前 紡錘車 (土製) 145 152 新城山

図版 21 146 弥生後期 147 終末期土器 148 149 新城山

図版 22 150 土器 151 田形土器揚げ底 152 田形刺突文 土器 新城山

紡錘車 153 新城山 154 玉山 155 天神沢 156 157 桜井 158 159 上ノ原

図版 23 天王山式土器

160 161 上ノ原 162 天神沢 163 唐沢 164 駒ヶ嶺

図版 24 165 弥生土器 後期 166 167 上ノ原 168 169 桜井

図版 25 170 石胞丁 171 有角石斧 172 刀部形石斧 173 片刃石斧 174 土器 (無文) 東町場

古式土器 175 高塚形土器 176 台付形土器 高見町 (桜井)

図版 26 177 石製模造品 178 179 上ノ原 180 181 桜井 182 百間沢 183 184 塚原

図版 27 185 相馬双葉地方の渦巻文 186 羽山横穴 187 清戸追横穴 188 土偶 羽山遺跡

189 桜井式土器 190 191 聖石 聖石神社

図版 28 192 浪岩横穴の線刻画 193 194 鎌形

図版 29 195 浪岩横穴の線刻画 196 ハリネズミ型の人 197 鬚を結う人 198 魚山と鎌形

図版 30 199 土師器を出土する貝塚

200 山志田 A 貝塚 山志田 B 貝塚

図版 31 古瓦 1

201 京塚沢瓦窯跡 202 (柴田氏蔵) 203 館前遺跡 204 館前遺跡 205 上人壇院寺跡

図版 32 古瓦 2

206 館前遺跡 207 黒木田遺跡 208 植松院寺跡 209 泉慶寺跡 210 御所内院寺跡

図版 33 古瓦 3

211 龍山瓦窯跡

図版 34

34 都山五香遺跡 34 植松庵寺跡 26 泉林山 26 中ノ内 26 28 朴木原
古瓦 4

図版 35

35 小野高師堂 29 高松 29 29 赤木 29 29 黒木田遺跡
古瓦 5

図版 36

36 新成山瓦窯跡 28 真野明神 28 28 館山
古瓦 6

図版 37

37 堀崎 29 入道迫瓦窯跡 29 植松庵寺跡 29 水無川 29 折ヶ沢 29 29 北山
古瓦 7

図版 38

38 29 堀崎 29 29 山辺 29 29 大垣
古瓦 8

図版 39

39 真野神社東 29 阿波国分寺跡 29 館前
古瓦 9

図版 40 吹子口 ①

39 29 丈六庵堂跡 31 社山古窯跡

図版 41 吹子口 ②

31 藤金沢 31 山田迫 N 31 赤木 31 山田迫 Y 31 御壇 31 島井沢 31 原 31 出口

図版 42

吹子口 ③
31 滝沢 31 原

挿図目次

挿図 1 刀部形石斧 局部磨製石斧 藤石衛門屋敷遺跡

2 石刀鍔 ① 葛尾村 ② ペリナカ

3 袂伏耳飾 羽白 A

4 櫛倉式土器 駒ヶ嶺

5 紡錘車 放射状刻突文 坂井

6 紡錘車 山形状沈線文 羽山岳

7 古式土師器に伴う紡錘車 坂井

8 磨製石剣 原山

9 清戸迫横穴群発掘調査スナップ

10 タツシ、ナゼエール岩壁画、馬

11 渦巻文水差し アステカ文化

12 白鹿 羽山横穴

13	ハリネズミ髪形の人 浪岩横穴
14	ハリネズミ髪形の人 高井田横穴
15	古式土師器 板井
16	鬼瓦復原図 館前
17	吹子口 唐神
18	三宝荒神像
19	墳墓遺骨器 入道道

表 目 次

表1	相馬双葉地方黒曜石出土覚書
表2	相馬双葉地方出土鉄状耳飾一覧表
表3	相馬地方硬玉加工品出土地一覧表
表4	相馬双葉地方出土アメリカ式石鍬調査表
表5	相馬双葉地方出土土製紡錘車調査表
表6	相馬双葉地方主要弥生遺跡出土品調査表
表7	板井遺跡出土古式土師器概表
表8	相馬双葉地方石製模造品出土地一覧表

表9	相馬双葉地方古瓦出土地一覧表
表10	相馬双葉地方製鉄関連遺跡調査表

古 代 篇

第一章	古代の概観	九一
第二章	国・郡の設置	九四
第一節	国造の支配	九四
・古墳文化の発展(九四)	・古墳文化の様相(九五)	・国造の支配(一〇九)
第二章	国・郡の設置	一一三
第三章	律令体制下の相双地方	一一七
第一節	律令体制	一一七
第二節	郡と郷	一二七
・郡・郷の設置(一二七)	・『和名抄』記載の郡郷(一二二)	・行方郡の「むら」(一二四)
第三節	条里の遺構	一二九
第四節	万葉の里	一三五
第四章	陸奥の開拓と相双地方	一三八

第一節 陸奥の開拓と蝦夷平定	一三八
・陸奥の開拓(二三八)	・坂上田村麻呂の蝦夷平定(二四〇)
第二節 行方軍団	一四二
第三節 地方豪族の台頭	一四六
・氏姓制度(二四〇)・郡民制と中央豪族の進出(二四七)	・征夷と地方豪族の動き(二五〇)
第四節 式内の神々	一五一
・古墳時代の信仰(二五二)	・式内の神々(二五四)
・鹿島神の分布(二六二)	
第五章 武士と荘園	一六五
第一節 荘園の発生と武士の台頭	一六五
・荘園と武士のおこり(一六五)	・平将門の乱(一六六)
・藤原政権の確立(一六八)	・荘園の普及と郷の没落(一六九)
第二節 平安末期の状況	一七三
・いわゆる海東平氏の五氏分封(一七三)	
第三節 薬師堂石仏と仏教文化	一七五

中 世 篇

第二章 中世の概観	一八三
第二節 相馬氏の行方郡領有	一八五
第一節 「奥州合戦」と相馬氏	一八五
第二節 相馬氏と新田岩松氏	一八八
第三節 相馬氏の行方郡移住	一九〇
第四節 鎌倉期における相馬一族の支配	一九六
第五節 標葉氏と標葉郡(庄)	一九九
第三章 南北朝の動乱と派通り	二〇一
第一節 建武新政	二〇一
第二節 南北朝動乱と相馬一族	二〇三
・建武新政と相馬氏(二〇三)	・相馬重胤ら北党となる(二〇五)
・城の攻防(二〇七)	・雲山宇津塞攻撃と相馬氏(二二二)
・宇多郡に支配権を及ぼす(二二三)	・相馬氏の発展(二二六)
第三節 標葉氏の動向	二二七

第四章 室町時代の相双地方

第一節 薩川・稲村公方と相双地方

第二節 岩松義政千倉庄へ移る

第三節 海道五郎一揆

・国人一揆の時代 (二二三)・「宇多庄合戦」と十五世紀のようす

(二二五)

第四節 標葉氏の滅亡

第五章 戦国の世——相馬と伊達氏

第一節 伊達「天文の乱」と相馬氏

第二節 相馬義胤と伊達政宗

第三節 中世の終焉

第四節 戦国時代の領内統治

第六章 中世の社会と文化

第一節 中世の村々

・中世の村 (二四五)・在家のすがた (二四七)・在家の負担

(二四九)・太閤検地と村々 (二四九)・かや浜村の百姓 (二五三)

第二節 中世の文化

二五九

第七章 中世の城館

・神祇信仰 (二五〇)・天台・真言宗 (二五九)・新仏教の普及 (二五九)

・中世の磨崖仏 (二六一)・美術工芸 (二六四)

・黒木城 (二六八)・真野古城 (二七一)・箕首城 (二七三)・牛越城

(二七七)・別所の館 (二七九)・諸戸城 (二八〇)・権現堂城 (二八二)

・相馬中村城 (二八三)・小高城 (二八八)・その他の主な城館 (二九二)

二六七

近世篇

はじめに

第一章 藩体制の成立(慶長—貞享)

第一節 領土の没収と本領安堵

第二節 中村繁城と城下町の成立

第三節 隠居分領の成立

第四節 藩庁機構と郷村支配体制の確立

第五節 元和の訴訟と相馬の給人郷土制度

第六節 知行制と俸禄制

第七節 検地と田制

二九七

三〇七

三〇七

三一一

三三八

三三〇

三三六

三四八

三五三

第八節 農民政策と百姓法令	三六〇
第九節 末期の養子制度と相馬藩	三七一
第一〇節 明暦・寛文の政治	三七四
参考資料 1 相馬忠胤と熊川長定	二八三
2 忠胤寄合衆に論せる書	三八四
第一二節 文化と産業	三八五
一 文化	三八五
二 産業	三九六
第二章 藩体制の展開(元禄・寛延)	四〇二
第一節 元禄・享保の政治と財政	四〇二
第二節 元禄を中心とする文化と民俗	四〇六
参考資料 1 元禄時代の和歌と流歌	四三五
2 相馬における小詞一覽	四四一
第三節 野馬追	四四七
第四節 産馬とその他の産業	四五二
第五節 元禄時の隠居分領	四五七
第三章 藩体制の解体(宝暦・慶応)	四五九

第一節 天明凶作と財政の窮乏	四五九
参考資料 1 天正十四年より天明四年までの出来高	四六六
2 天明八年妙見社に奉った藩主祥庵の願文	四六七
3 間引通正の資料控	四六九
第二節 凶作の善後策と文化期の藩政改革	四六九
参考資料 1 武家法令	四七七
2 寺社方へ仰付けられ候趣	四八〇
3 又者足輕以下	四八一
4 御城下住居下々家作の定	四八二
5 足輕以下家作の定	四八三
6 町人法令	四八四
7 社会御取違覚	四八四
第三節 移民の招致	四八九
参考資料 1 相馬における真宗寺院(開書)	四九二
第四節 二宮仕法の採用	五一四
付 軍川・石川の開墾	五一四
参考資料 1 御仕法心得書	五一六
2 富田高嶺と二宮仕法	五一九

3 興復社と北海道移住	五二六
第五節 交通・交易	五三四
参考資料 1 漂流について	五四〇
第六節 諸産業	五四一
参考資料 1 塩田記録	五四六
2 相馬産業史抜粋	五五〇
第七節 文化	五五九
一 文教	五五九
(一) 長松寺と物光	五五九
(二) 藩校育英館	五六九
二 文学をもちたてた人々	五七三
参考資料 1 宝暦・明和の和歌と文化・文政以降の俳諧連歌	五七六
2 馬陵詞藻抄	五九〇
二 習俗	六〇一
(一) 武家年中行事	六〇一
(二) 農家の年中行事と習俗	六〇四
参考資料 1 「農家古式」より	六〇六

2 年中行事(相馬の風俗および祭式)	六〇八
3 「相馬領習俗聞書」	六二八
4 風俗(相馬史より)	六二八
第八節 榛新直前の相馬	六三〇
一 金蔵院と慈隆	六三〇
参考資料 1 慈隆と相馬	六三四
二 寺小屋より新教育へ	六三八

近代篇

第一章 戊辰戦争	六四一
第一節 相馬と戊辰のいくさ	六四一
第二節 相馬、戦乱にまきこまれる	六四二
第三節 誰が動員されたか	六四八
第四節 軍備充実の苦心	六五四
第五節 戦争の経過	六五九
第六節 占領下の相馬	六六六
第七節 戦争による打撃	六七六

第八節 恩讐を越えて	六九二
第二章 藩政の終末	六〇六
第一節 本領安堵	七〇六
第二節 近領取締	七二二
第三節 販路率還と中村藩	七二六
第四節 兵制改革	七二四
第五節 中村藩の教育と愛宕の学塾	七三三
第六節 廃藩置県	七四八
第七節 藩士の生活	七五一
第八節 藩士土着の始末	七五五
第九節 土着の町村配置	七六二
第十節 藩の解体と二宮仕法	七七九
第三章 明治の变革	七八六
第一節 明治の变革	七八六
第二節 人身売買の禁止	七九〇
第三節 神道の教導	七九七
第四節 文明開化の道	七九九

第五節 地租改正と地券の発行	八二五
第六節 明治初期の農民生活	八二〇
第四章 明治時代の産業	八三二
第一節 藩と商人の結びつき	八七二
第二節 中央大商人の進出	八三六
第三節 明治初年の土地と産物	八四四
第四節 在 町	八六一
第五章 相馬開発	八六四
第一節 交通の発達	八六四
第二節 耕地の開発	八六六
第三節 官公署の誕生	八八〇
第四節 近代文明の恩恵	八八九
第五節 村の政治	八九七
第六章 近代相馬人の活躍	八九七
第一節 相馬人の活動に二宮仕法	八九七
第二節 産業の発展に伴う相馬人の拡散	九〇九
第三節 教育の進歩と相馬人の活動	九一九

第四節 海外に発展した相馬郷友会の人びと……………九三五

年 表

原始篇……………	九七四
古代篇……………	九八〇
中世篇……………	九八六
近世篇……………	一〇二二
近代篇……………	一一三

原始篇